詩編３０編の黙想：主は、引き上げてくださる（2020 年 5 月 27 日用　TM）

　詩編 30 編は、疾病から癒され、瀕死の災いから免れた感謝の歌です。「主よ、あなたをあがめます。」新約聖書のギリシヤには２つの復活言語があります。一つは「引き上げる」（egeirō）です。「眠りから起こす」という意味もあります。通常は神によってある人が死者の中から「引き上げられる」と「受動態」で表現されます。もう一つは「復活」（anastatis 再び立つ）です。やがて、世界は、とこしえの朝を迎えることを黙想しましょう。闇に打ち勝つ「東雲（しののめ）」（詩 57: 9 、108:3）が近づいています。（ローマ 13:11-14）

・詩編は「引き上げる」（dillîtānî）を２、３節で用いています。「主よ、わたしを引き上げてくださいました」。「主よ、あなたはわたしの魂を陰府から引き上げ/墓穴（16:10 参照）に下ることを免れさせ、わたしに命を得させてくださいました」。眠りから覚める日が来るので、キリスト教信仰では、「永眠」という用語を避けます。ずっと寝ているのではないからです。「冥土（途）」は、死者が数日間彷徨っていると考えるイスラエルの民間習俗における「陰府」（š’ōwl）に近いですが、儒教的な？「御冥福」を祈りません。「わたしが死んで墓に下ることに何の益があるでしょう。塵（元の塵に戻ったひと）があなたに感謝をささげ、あなたのまことを告げ知らせるでしょうか」（10 節）とある通りです。死は「主のまこと」を告げる「宣教」の喪失なのです。こうして、イスラエルは積極的にこの世で生きることを大切にし、エジプト人のように「死の世界」を夢想しません。詩編 30:4 は詩編 16：10 に似て、間接的に復活信仰を暗示しているのでしょうか。眠りにつき、起きることの毎日の営みは、死と復活の練習のようなものかも知れません。あるいは泣きながら夜を過ごす人にも/喜びの歌と共に朝を迎えさせてくださる」（6）のです。死や病に直面して、神が怒っておられると感じ、信仰が動揺することがあったとしても、それは、「命を得させる」（4、６）こと、嘆きを踊りに変えること（12）を目的としているのです。
・そうだからこそ、私たちは、神の「癒し」（3 節 rāphā　縫い合わせ、繕う)を経験し、慈しみ（5 節 hesed）に生きる人として、「憐れみ」（9 節 ‘athannān 哀願する、乞い願う、11 節 wəhānnênî 憐れみを与えて下さい）を祈ることができるのです。
・人のなすべきこと　人のなすべきことは、沈黙することなく（死とは沈黙であり、賛美の喪失です 13 節)、賛美の歌をうたい(5 節 zammərū)、御名を唱え、感謝をささげること（5 節 直訳 彼の聖なる記憶において感謝せよ hōwdū、10 節 hăyōwdkā、13 節 ‘ōwdekā)、主なる神の「まこと」（amittekā）を告げ知らせることです。死は賛美の喪失であるばかりか「主のまこと」を告げる「宣教」の喪失なのです。
・人は死と病に怯え、神を見失ったように感じて（神は決して私たちを見失ったり、忘れたりはなさらないのですが！)「恐怖に陥る」こと（８節）もあることでしょう。人生はときに、過酷です。しかし、永遠の相の下では、「喜び」を帯とすること（12 節）ができます。帯がない着物は見られたものではありません。諸経験、諸感情を束ねる「喜びの帯」を結んで歩みましょう。天皇制軍国主義下、信仰を曲げず獄中生活を過ごした安藤仲市先生によれば、獄屋では、首を吊らないように寝間着（囚人服）に帯が与えられなかったそうです。居住まいを正してキリスト者として「凛」として証をするため、一日中正座していたと言われました。その際、「真理を帯として腰に絞め」（エフェソ 6:14）との言葉の重要性を思ったそうです。皆さんは「喜び」、「真理」、あるいは、「愛」？　何を帯とするでしょうか？